

中國文化の受容について

森 鹿 三

一

「中國文化の受容について」という、たいへん茫漠とした演題を掲げましたが、本日申し上げますのは、その中の一小部分なのであります。實は學會の世話人の方から講演の依頼があつた時に、中國文化の受容についてならば何かお話ができるでしようといつておいたのですが、そのご限定もせず修正も加えないままに、とうとう本題になつてしまつた次第です。その點まずおことわり申し上げておきます。

さて私、昭和二十年代には正倉院の御物を中心にして中國文化の受容について考えてみましたが、その他の問題に移り、最近では「令集解（りようのしゆうげ）」を資料にして令の訓詁的解釋のあり方を解明したく努力しております。令といひますのは律令の令でありまして、もともと中國の根本法典であります。律が今でいう刑法に當るのに對して、令というのは行政法に當るわけです。もつと適切に言えば、律が刑罰を伴なう法規であるのに對して、令は刑罰を伴わない教化的法規であります。この律令という法律體系は、中國では長い世紀にわたつて磨きがかけられたものでありまして、唐代になりましてきわめて整備された段階に達しました。それで中國周邊の後進國家でも、唐の律令をとりいれたのでありまして、わが國でも七世紀中ごろの永徽律令をモデルにして法典を編集したのであります。現在、その當時の律令がどうなつてゐるかといひますと、中國では令がなくなつて律が残り、日本では律がほろ

んで令が残っているのです。中國に残つた「唐律疏議」というのは永徽のち一世紀ほどたつた開元年間にできた律の本文に疏議つまり律文の解釋のついたものであります。ちやうどそれと同じく、わが國でも令の本文だけではなく、それに注釋の伴なつた「令義解（りようのぎげ）」とさきほど申した「令集解」が残っているのです。そしてこの令の本文は大寶令ではなくてその二十年ほど後にできた養老令でありますが、この養老令に對して一定の解釋を與えたのが「令義解」で、清原夏野らが勅命をうけて編集し、淳和天皇の天長十年（八三三）に奉つたものであります。一方「令集解」というのは、その名のごとく澤山の人の解釋を集めたもので、古いものは古令つまり大寶令についてのノートである「古令私記」をはじめ、新令つまり養老令に對する解釋である「新令釋」や明法博士の讃岐某・穴太某・伴某等々のノートである「讃記」・「穴記」・「伴記」等々といわれる私記を惟宗直本が編集したものであります。養老令の本文を適宜區分し、本文のあとにそれに應ずる解釋を配當したのであつて、まず義解を置き、つぎに「新令釋」・「古令私記」（「古記」ともいう）その他の私記、編者の見解という順序で構成されています。この私記の中には「令義解」編集以前のものもあれば、以後のものもあります。たとえば「伴記」——伴宿禰宗の私記と考えられる——などは、令の本文ばかりでなく、それを解釋した義解の語句をも注釋しておりますから、明らかに「令義解」以後のものであります。従つてこの「伴記」を含む「令集解」は、さらに「伴記」以後の編集ということになります。まず九世紀の後半、清和天皇の貞觀年間にできたものと考えられております。

ところで令つまり當時の日本臣民の遵守すべき教化法は、内容は勿論のこと、その表現までも中國を模範としたのであります。すなわち漢文で書かれているのであります。そこでこれを解釋するに際して、法律的解釋に先だつて漢字漢文の訓詁的解釋をする必要があるわけでありまして、「令義解」でも「令集解」でも、そのなかばは訓詁的解釋に占められています。そして義解とそれ以外の解釋を比較してみますと、義解ではその訓詁のよりどころを示していませんが、集解に見える「古記」など義解の編集される以前に存在した令の注釋を集大成したものであることがわか

ります。それでは「古記」などの訓詁はどうかといいますと、中國の古典の注釋をふんだんに引用していて驚歎されるのであります。餘談になりますが、京都大學を卒業します前後のころ、三浦周行先生からこの「令集解」所引の漢籍を調べることを命ぜられ、少しくその仕事を進めたことがあります。三浦先生が急逝されましたために頓挫してしまい、近ごろ京大法學部で法制史の講義をすることになって、この仕事をやり直す機會を得たのであります。そこで改めて「古記」などに見える漢籍を調べますと、その中には最も古い「古記」のできたと思われる天平時代でも既になくなつていたはずの漢籍が引用されているのであります。そうするとこれらの引用は直接にその漢籍からではなく、何か字典とか事典とかからの間接的引用ではなかつたかと想像されてくるのであります。勿論、中國になくてもわが國に残存する漢籍がありうるわけですが、そうとも受けとりにくい面がありまして、今いう間接的引用の線で調べることに努力してみたわけです。その結果、「古記」などに見える漢字の訓詁の多くは、陳の顧野王の作つた「玉篇」という字書にもとづいていることがわかつたのであります。今も「玉篇」という字書がありますけれども、簡單なものであつて、まず反切で音を與え、その意味を略記してあるだけです。顧野王の「玉篇」から脱化したものですが、全く別書といつてもよいほどのちがひです。この顧野王の原本玉篇は中國ではなくなつていますが、幸にもわが國に僅かながら、分量にしてその十分の一ほどが残つていたのであります。全體三十卷の中で、八・九・十八・十九・二十二・二十四・二十七の卷にまたがつていますが、完全なのは二十二・二十七の二卷で前者は久邇宮家であり、後者は前半が栴尾の高山寺、後半が近江の石山寺に別々に所藏されています。明治のはじめに黎庶昌という中國の公使が参りました、この種の中國に失われて日本に存する、いわゆる佚存書を集めました際、この原本「玉篇」もその對象になつたのであります。そしてこの仕事の顧問役になつたのは書家であり書誌學者・地理學者でもあつた楊守敬でありまして、この人が日本の古書蒐集家を通じて、そのような貴重な漢籍を集めたのであります。さらに集めた貴重書を複製して「古逸叢書」と名づけました。徳川時代に大學頭の林述齋が「佚存叢書」というものを出版して

いますが、ちようどそれを繼承した形になります。まず九・十八・十九・二十七の四巻が出版されましたが、知恩院の鵜養徹上人が黎庶昌に、このほかに「玉篇」の殘卷の存することを注意され、影寫して送られたのであります。一つは九巻の殘缺で福井崇蘭館所藏のもの、もう一つは前述の二十二巻で久邇宮家にあつたものです。黎庶昌は早速にこれらをも複製して「古逸叢書」に收め、その經緯をあとがきに詳しく記しております。明治十七年のことで、それからずつとおくれて昭和八年から十年にかけて、すでに黎庶昌の複製したものを含め、今まで複製されていなかった卷八・二十四の殘簡も原形どおり忠實に複製されました。これは私が前に奉職していました東方文化學院の事業の一つとして行なわれたものであります。

だいぶ話がそれでしたが、この原本「玉篇」が僅かながら殘存しておりますために、「令集解」に見える令の本文の訓詁的解釋の主たるよりどころが明らかにできるのであります。勿論、原本「玉篇」が僅かしが残つていませんので、令の訓詁が「玉篇」に依據することを十分に證明できませんが、ここにもう一つたよりにできる方法がございます。それは弘法大師の作られた「篆隸萬象名義」という書物であります。漢字の篆書と隸書——實は楷書——を記し、その下に發音と意味が与えてあります、一種の字書であります。これを調べてみますと原本「玉篇」の順序に漢字が配列してあり、さらに音の反切も一致しますし意味も原本「玉篇」を簡略にしたものなのです。前に申しました現在の「玉篇」と同じアイデアで作られているのであります。ただこの「篆隸萬象名義」の方がその配列、音義ともに原本「玉篇」に忠實なのであります。それで使い方によつては原本「玉篇」の代用にもなるのでありまして、殊に今の場合、令の訓詁が原本「玉篇」にもとづいているかどうかを確かめる場合にはうつつけの資料になります。この「篆隸萬象名義」は原本「玉篇」の第二十七巻の前半のある高山寺に所藏されていまして、大正の末年か昭和のはじめに「崇文叢書」にその複製が收められました。また最近では高野山大学から新たに複製本が出版され見易くなりました。

ともかく原本「玉篇」のないところは、この「篆隸萬象名義」を代用して、さきほどの仕事を進めることができるわけでありまして、その結果、令の訓詁の大半は原本「玉篇」にもとづいていることが明らかになりました。さらにその他の部分についても調べなければならないのでありまして、漢字の發音についても、原本「玉篇」ではなくて、「切韻」というような音韻の書物を利用してゐる部分も少くないので、「令集解」に見える漢字音について總ざらえをして、そのよりどころを明らかにせねばならないと考えております。また單獨に直接引用をした漢籍もあつたわけでありまして、一方では字典とか事典とかの間接引用であるかも知れないので注意を怠つてはならないと思います。「令集解」の中にも數か所、事典——中國流にいえば類書——を利用してゐると思われる部分がありますが、そのもとづいた類書を確言するには少しく問題がありますので、別の方面からこの類書の利用について申し上げることにします。

二

中國文化を受容する上で、さきほどの「玉篇」のような詳細をきわめた字典を利用するとともに、事物を類別してそれに關係ある文獻記事をかきぬいた類書が大いに活用されたであろうことも見易いところであります。私がこのことを痛感いたしましたのは「喫茶養生記」の譯注を作つた際であります。著者の榮西禪師は入宋して禪宗を始めてわが國にもたらした人ですが、また禪宗には喫茶が缺かせぬところから茶の實をわが國へ輸入したことでも知られてゐます。榮西禪師はまず福岡と佐賀の境の脊振山に茶の實をうえ、さらに高山寺の明恵上人に茶の實を送つて梶尾で栽培してもらつたのであります。嵯峨天皇の時代に茶の栽培を奨励されたのですが、そのご衰えていたのを榮西禪師の時になつて再興したのであります。榮西禪師は源實朝の宿醉を喫茶によつてなおしたのを機會に「茶の徳を譽むる所の書」を獻じたのでありますが、それがこの「喫茶養生記」であるといわれています。さて「喫茶養生記」の

中には茶の名字、樹・花・葉の形、功能、採取時節、採様を述べる五つの章がありますが、そこには二十二種の中國文獻が引用されています。これら文獻の過半は現在なくなっていますが、榮西禪師の時代つまり十二・三世紀のころでもすでに存在していなかったであろうと思われるものが相當にあります。そうしますと榮西禪師は何かを媒介にしてこれらの文獻を使つたことになるわけですが、いろいろ調べました結果、その中の白氏六帖と白氏文集を除いたほかはすべて「太平御覽」の卷八百六十七の茗つまりお茶の條に收められているものを活用しているのであります。

この「太平御覽」は一千卷に上るポリュミナスなもので宋の太宗の太平興國八年（九八三）にでき上つていますが、この中國に關する知識の寶庫ともいふべき類書が、いつたい何時、わが國にもたらされたのでしょうか。このことにつきましては、不思議なことに記録が残っているのです。それは治承三年（一一七九）のことで、入手したのは平清盛だつたのであります。そしてこの年の十二月十六日に東宮言仁親王、つまり清盛の外孫で、のちの安徳天皇が清盛の八條の亭に行啓された時に、清盛は珍重していた木版の「太平御覽」を献上したのであります。當時の記録には、これを「太平御覽」の本朝における流布の始としています。だが、ここにちよつと不都合なことがあります。と申しますのは、治承三年より三十六年前にこの書を見ている人があるのです。それは例の保元の亂に崇徳院方について敗死した悪左府頼長でありまして、その日記であります「台記」の康治二年（一一四三）九月廿九日の條に「御覽の卷第一百三十八を見おわた」と書いております。頼長は日本第一の大學者といわれ、ことに漢籍を博く讀んでいたもので有名でありますが、この人が既に「太平御覽」を見ていたとすると、この類書を手したのは、さきほど申したように平清盛が最初だといえなくなります。これはいつたいどうしたことでしょうか。ただ少し注意して見ますと、清盛のことを記した文獻——「百練抄」・「山槐記」・「妙槐記」など——では「太平御覽」と明記しているのに對して、「台記」の方はさきほど引用しましたように、ただ「御覽」といつています。「太平御覽」のことを「御

「覽」と略稱することは普通ですから、「台記」にいう「御覽」が「太平御覽」でないといえませんが、「御覽」と名のつく書物で百三十八巻以上のボリュームのものであれば、一應それに該当するわけです。結論からさきに申しますと、頼長が巻首から百三十八巻まで読みおわたという「御覽」は「修文殿御覽」であつて「太平御覽」ではなからうと思うのであります。

ところで「修文殿御覽」というのは北齊の祖斑らが編集した三百六十巻の類書でありまして、前に申しました「玉篇」の編者、顧野王とほぼ同じ時代に當ります。當時、中國は南北朝の末期で、やがて隋が南北をあわせ、わが國からも小野妹子が遣隋使として中國に派遣されるわけです。それはともかく、「玉篇」は南朝で作られ、「修文殿御覽」は北朝で作られたのであります。少し立ち入つて申しますと、この「修文殿御覽」というのは、南朝でできた「華林遍略」をもとにして、北魏など北朝の記事を増補したものだといわれています。宇多天皇のころにできました「日本國見在書目録」によりますと、この「華林遍略」も「修文殿御覽」も記載されていますから、當時これらの南北朝末の類書がわが國にもたらされていたことが明らかなのであります。念のために申しそえておきますが、「日本國見在書目録」には「修文殿御覽」につづいて、「類苑」・「類文」・「藝文類聚」・「翰苑」・「初學記」などの類書が列記されています。

わが國に輸入されたこれら多くの類書は中國文化を理解する上において大いに活用されたわけですが、話をしばらく「修文殿御覽」にしばらくすることに致します。この類書は中國でもわが國でもなくなつていたのですが、今世紀のはじめに敦煌から発見された類書風の一殘巻がそうではなからうかといわれたのであります。しかしそれもよく調べてみると「修文殿御覽」ではなく、むしろ前に申した「華林遍略」に擬定した方がよいといわれるようになり、「修文殿御覽」の姿をしのぶてだては今のところ全くなつてしまいました。

そこで私はわが國の古書の中にこの「修文殿御覽」を引用しているものを注意することにしたのですが、幸にもそ

の端緒をつかむことができました。それは亮阿闍梨兼意の「實要抄」・「香要抄」・「藥種抄」・「穀類抄」という一連の抄でありまして、これらは密教の方の行事に用いる實・香・藥・穀についてのインドや中國の知識を總合したものです。そこに中國の類書が利用されているのであります。そしてこの中の「藥種抄」甘草の項には「修文殿御覽卷第三百にいう」と明記して引用している場所を発見できたのであります。これだけにとどまらず、この四つの抄の中で單に御覽として引用しているものも「修文殿御覽」であると推定できるようになり、「修文殿御覽」の姿が少しずつはつきりして参りました。今も申しましたように、甘草のことが「修文殿御覽」の卷三百にあることがわかり、「香要抄」の方から芸(うん)香というお香のことが卷三百一に出ていることがはつきりました。「太平御覽」で申しますと、前のは卷九百八十九、後のは卷九百八十二に載っていますから「太平御覽」からの引用でないことは明らかです。その上に香藥の順序が、「修文殿御覽」では藥が前で、香が後であつたのが、「太平御覽」ではその反對になつたことがわかつたのであります。さらに四つの抄に引用されている「修文殿御覽」の佚文の條項數は僅かですが、「太平御覽」と比較して大體その順序も一致しますし、前者を包攝していることもわかりました。いいかえますと、「修文殿御覽」は「太平御覽」の中に埋没しているといつてよいかと思ひます。じじつ「太平御覽」を編集する時に「藝文類聚」や「文思博要」とともに「修文殿御覽」を利用したことは「宋會要」に明記されていますが、この四つの抄によつて考えたところでは「修文殿御覽」がその骨格になっていると推定できます。さてこの四つの抄の編者の兼意は父の藤原定兼が皇后宮職の亮であつたところから亮阿闍梨と通稱されるのですが、この人は保元の亂後二年になくなっていますから、さきの藤原頼長と同時代人であるわけであります。兼意の四つの抄では、ただ一か所だけ「修文殿御覽」とフルネームで書かれています。他はすべて「御覽」と略稱されています。こんなことから同時代人である頼長の「台記」に見える「御覽」も「修文殿御覽」とみてさしつかえないののではないかと思います。そうすると「太平御覽」という空前の大類書は治承三年に平清盛がはじめて入手したものとしてよいことになります。

清盛が入手して以後、八十年ほどの間にわが國に輸入された「太平御覽」が數十部に及んだことは、さきにあげました「妙槐記」に記されています。榮西の「喫茶養生記」はちようどこの「太平御覽」ブームの時期に作られたということになります。

三

「修文殿御覽」が北齊の時代にできましてから「太平御覽」のできますまでは四百年ほどありますが、その中間、「太平御覽」のできる一世紀半以前、淳和天皇の天長八年（八三一）に、わが國でも類書ができるのであります。それは滋野貞主の作つた「祕府略」でありまして、巻數も「太平御覽」と同じく一千巻というポリュミナスなものです。残念なことに現在ではその中の卷八百六十四（百穀部中）と卷八百六十八（布帛部三）のわずか二巻しか残っていませんが、これからその體裁や内容が知られるのであります。「太平御覽」の該當部分と比較してみますと、きわめて興味深いのでありまして、やはり「修文殿御覽」を骨格にしているのか、よく似ているのであります。さらに「祕府略」の方は各項のあとに、「日本國見在書目錄」にも載つていました類書「初學記」と「翰苑」の記事を附録しています。これは「太平御覽」とはちがつています。ともかく今まで多くの類書を中國から受け取るばかりでしたが、こんどは自分の手で中國風の百科事典を作る能力ができてきたわけです。編者の滋野貞主は漢詩文集「經國集」を編集しています。また「祕府略」のできた翌々年に、はじめに述べました「令義解」ができ上つています。このことは伊藤仁齋の息、梅宇の「見聞談叢」に指摘していますので引用しておきます。

淳和帝の時、滋野貞主に命じて近代の詩文をあつめしむ。經國集と號す。その後又古今の文書をゑらばしむ。祕府略と號す。一千巻あり。清原夏野、令義解をゑらんで奉る。淡海公のあらわし玉ふ令の註なり。

まことに簡明な表現ですが、中國文化受容の一つのピークを言外に感じさせます。さらにこのあと百年ほどして源順

の「和名類聚抄」ができ上ります。ここに至つてわずか十卷の簡略なものです。漢字漢語を和名によつて解釋する漢和字典を兼ねた事典の段階に達するわけで、次第に國風文化へと移行してゆくわけです。因みに字典としては、「和名類聚抄」の前、醍醐天皇の昌泰年間（八九八—九一一）に、昌住というお坊さんによつて「新撰字鏡」十二卷が作られています。「玉篇」風の字書で部首によつて漢字を集録し、それに音義を付したものです。中には和名を与えたものもあつて「和名類聚抄」の先驅をなしているのです。ともかくこうして類書と同様に字書の方でも漢和字書そしてやがて國語辭典へと發展してゆくのであります。

（一九七〇年六月一八日講演）

關 係 拙 稿 一 覽 表 （發表順）

紫微中臺より出發して	學藝	32	昭二・一〇
大陸文化受容の一面	學藝	34	昭二・一二
正倉院御物と東大寺獻物帳	『正倉院文化』		昭二・一一
飛鳥奈良時代の文物制度	『飛鳥奈良朝の文化』		昭三〇・五
正倉院藥物と種々藥帳	『正倉院藥物』		昭三〇・一二
喫茶養生記譯注	『茶道古典全集』2		昭三三・七
藥種抄について	ビブリア	17	昭三五・一〇
亮阿闍梨兼意の香要抄について	『塚本博士頌壽記念佛教史學論集』		昭三六・二
修文殿御覽について	東方學報 京都	36	昭三九・一〇
香字抄と所引の翰苑について	生活文化研究	13	昭四〇・一
令集解所引玉篇考	東方學報 京都	41	昭四五・三